

悲しきかな、戦争の思い出

中郡支部 石川 映子（妻）

戦没者 石川 勇

戦没地 レイテ島

戦後六十五年、忘れる事の出来ない辛い事ばかりでした。

私は東京北千住で生まれ、父が行商で母は二人目を産み産後の肥立ちが悪く、私が三歳の時他界しました。勿論、父の商売も左前で家売り払い仕事の都合で神奈川にと父がよく話していました。

私は学校卒業後、ある工場に世話してくれる人がいて、そこで主人と出会いました。そして、「自分は一人っ子ゆえ戦地に行ったら親の事が心配なので嫁に来てくれないか」と、言われました。私はまだ早いと思いましたが、実家の父親も病弱で兄弟はまだ小さいし、よく考え思案の末結婚を決めました。

その頃会社は目の廻る様な忙しさで、夜勤夜勤、徹夜徹夜の毎日でした。実家の父に比べ何て良く働く人、この様な人に恵まれ良かった、と思いました。間もなく長女出産、主人は平塚のある場所に徴用で行ったきり一ヶ月に一度位しか帰りませんでした。

昭和十九年（一九四四）三月、いよいよ出征の日が近づきました。

主人は両親の前にひざまずき、「西も東も分らない子を宜しく頼む」、私には、「両親を頼む」と言い残し出征、行き先は寒い寒い満州方面と聞きました。

その年の秋頃でしょうか、関東軍を乗せた軍用列車が国府津駅に四、五分停車する事を一色の人知らせにしてくれました。

早速時間に遅れない様、子どもを背負い国府津駅まで歩いて行きました。もう夕暮れで回りも薄暗く、せめて子どもを一目でも見せようとあわてました。

差し入れはいけないものと思い、あえて持たずに行きました。ホームに着いたら、「手分けして待とう」と言われ、義父は列車の前方に、義母は中央で、私は後方にいましたが逢えませんでした。中央にいた義母だけが主人らしい人を見たと言っていました。母の愛でしょうか、神様のおかげかも知れません。

帰り道も勿論歩いて帰るのですが足が進まず涙がとまりませんでした。

やがて歳月が過ぎ、満州ハルピンより軍事郵便が来ました。ハガキが来る度、書き出しに、子どもと私の名前が書いてあるので姑が私に辛く当たり、泣くばかりでした。該地は氷雪も消えてインチュールホウ（草花）が咲き始めた様です。

ソ連・満州の国境にいましたが、それもつかの間すぐ上海、フィリピンに転用され、レイテ島にて玉砕、帰らぬ人となりました。

玉砕と知らされても、自分が見た訳でもないので信じられません。

いよいよ昭和二十年（一九四五）七月十六日夜半から翌朝にかけてアメリカのコロネット作戦（九州・関東上陸進攻作戦）が始まり二宮町も列車の運行を妨害され、B29が二宮駅を機銃掃射、私たちは防空壕に逃げましたが、駅の待合室や駅付近では数名の方が亡くなりました。飛行機は駅と旧神保醬油屋（現相模信用金庫）の上を通過し南に向かって飛んで行きました

そうして八月十五日終戦を迎え、その頃新聞で何月何日に長崎・呉港に引揚げ船が入ることを知り、行きたかったのですが、もし乗っていなかったらどうする、と言われて涙を吞んで諦めました。岸壁の母ではないけれど、もしやもしやと心引かされました。

私も何か働かねばと、種々内職をしましたが大した収入にはならないので六十日ヒナ（ヒナ鶏を六十日育てて売買すること）をしました。が、しばらくして、昭和三十六年（一九六一）に学校給食が始まり、私も調理員として長い間勤めさせて頂きました。

都会では大きな空襲や学童疎開がありましたし、或いは着物を持って農家へ食料の買い出しに行っており、たけのこ族と言っていた様です。

それを見るとこの辺の人たちは幸せだと思い、感謝しております。私たちは戦争で家族をバラバラにされました。今の時代の方たちはもう少し家族を大切にして頂きたいものです。

国のため命を捧げて亡くなって逝った英霊の平和への思いを大切にして行きたいものです。